

自然体験の共有から学びが始まる

KEEP協会のインタープリテーションの考え方

人と自然をつなぐ人 インタープリター

「環境教育」という言葉を聞いたことがある人は多いだろう。山梨県の八ヶ岳の麓、清里高原に、様々な自然体験のプログラム開発や指導者育成を通して日本の環境教育をリードしてきたKEEP協会を訪ねた。そこに、人と自然とをつなぐ架け橋となり、主体的な個人を育てることを目標に仕事をする人たちがいる。インタープリターである。

直訳すれば「通訳者」である彼らは、自然について語るだけでなく、時間や場所、道具、あるいは参加者相互の関係を考慮して、様々な体験のプログラムをデザインし、参加者とともに実践する。

この場所で環境教育事業をつくりあげてきた川嶋直さんは、「言うことと伝わることは大違いで、人は体験と発見を通じて本当に理解する」と語る。「自然と言っても、人によってイメージするものが全く違うし、知っているようで実は知らないこ

今月は、自然体験を重視する環境学習の取り組みから、学びの機会をつくる事例を紹介します。
感覚を拡げて自然を体験し、他者に伝え分かち合うという造形にも通じる過程が重視されていました。

とだけかもしれない。環境教育においては、良質な自然体験が重要」だと、インタープリターたちは経験的に確信している。

自然に出会うための感覚と表現の「道具」

実際に、KEEP協会のインタープリターとともに清里の森に入り、自然に出会うプログラムを経験した。この日は十数名のグループで行動した。森へ入りしばらく歩くと、やや広い場所に出た。皮を鹿に食べられたという低い木に触ると、予想以上にひんやりと冷たい。促されて、他の木にも触れてみる。様々な触感、温度の違い。眺めているだけではなく、自然に直接触れるなかで、緊張がだんだんほぐれていった。すると、一枚の白い紙を渡された。しかしペンは渡されない。紙を空にかざしてみると、木の枝や葉の影が映り、揺れている。思わず参加者から「きれい！」と感嘆の声が上がった。うまく映れば、目の前に葉がある

ようにも見える。頭上の木々の広がりや近くに感じた」。

雨が降ってきたときは、ビニール傘をキャンバス代わりに、自然の素材でデコレーションをして見せた。少しなら葉をちぎって用いても良いそうだが、触ると危険な漆の見分け方なども教えてくれる。使える素材を探すなかで、小さな葉っぱの違いや、生えている場所の違いを感じ、感覚的な地図ができていくように感じた。

夜、森へ入った。真っ暗ななかにしばらくいると、だんだん目が慣れて森が見えてくる。そこに棲む生き物の話をしてもらおうと、闇の奥で多くの命が動き始めたような気がした。その後小さなろうそくに灯をつけた。しばらく見つめて吹き消す。すると、森はまた見えなくなった。人の生活には灯りが必要だが、逆に灯りが隠していることもあると感じた。

やがて森を抜け、夜の草原に寝転んで何もせずしばらく過ごす。身一つで味わう自然は、メディアが伝える自然破壊の現場よりも穏やかでゆつくりしていた。その後、それぞれの参加者が感じたことを伝え合った。森の静かさを東京での忙しい日々と比較する人、虫の声を数えている人、風の変化を感じている人…。一体何分間そこにいたのか、短く感じる人も、長く感じる人もいた。同じ時間、同じ場所でも、一人一人が異なる感覚で過ごしていることを知った」。

体験を学びにするために

プログラムの実践に際して、インタープリターは主に二つの役割を担う。一つは、その自然をより深く知るために事実や解釈を「伝える」こと。スライドレクチャーをすることもある。もう一つは、参加者がそれぞれの感覚で自然に向き合い、自由に考えることを「促す」こと。その入り口として、様々な観察や表現の道具やプログラムを用意する。インタープリターの仕事は、この二つの異なる学びを組み合わせながら成り立っている。

KEEP協会では、自然をただ体験するだけでなく「体験だけ学習」や、体験を一般論として語るだけで実際の行動へ繋がることのない「一般化だけ学習」にならないよう、体験を本当の学びにするために図1のサイクルを大切にしている。自然の感じ方を拡げるような様々な工夫をし、その体験を見つめる。感じたことや考えたことを振り返って表現し、同じ経験をした人と分かち合う。共感するだけでなく、視点の違いからヒントも得られる。ある人は、体験と共有の大切さを感じ、自らが保全活動をしている現場でのプログラムづくりに生かしたいと語った。このサイクルは、新たな体験や行動に繋がる動的な学びだと言える。

「人(プログラム参加者)・人(インタープリター)・自然」という三者の関係のなかで、自然は、想いや経験を共有する人の存在とともに姿を現す。

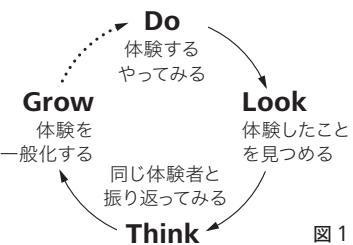


図1

写真はすべて「環境教育プログラム体験セミナー」から(二〇〇八年七月)

KEEP協会

一九四八年ポール・ラッシュ博士によって創設された。KEEPは、Kyosato Educational Experiment Project の略。一九三八年に清里に建設された清泉寮を中心に、青少年育成や環境教育、国際協力などに取り組んできた。環境教育事業部の川嶋直さんは、日本で環境教育という言葉が普及する前から自然体験型環境学習を模索し展開してきた。現在はインタープリターを養成する講座を担当する他、全国で環境教育の推進、普及にあたり、近年は企業や行政、NPOなどを結ぶ協働のネットワークづくりを積極的に行っている。
<http://www.KEEP.or.jp/FORRESTERS/>